



Title	Delayed decrease in differential renal function after successful pyeloplasty in children with unilateral antenatally detected hydronephrosis
Author(s)	松本, 富美
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49963
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	まつもと 松 本 富 美
博士の専攻分野の名称	博 士 (医 学)
学 位 記 番 号	第 2 2 3 5 5 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 20 年 4 月 21 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	Delayed decrease in differential renal function after successful pyeloplasty in children with unilateral antenatally detected hydronephrosis (出生前診断された一側性水腎症の小児における腎盂形成術後の分腎機能の変化について)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 奥山 明彦 (副査) 教 授 福澤 正洋 教 授 大菌 恵一

論 文 内 容 の 要 旨

〔 目 的 〕

産科的超音波検査の普及に伴い、出生前に腎尿路異常を指摘される小児が増加しているが、尿路拡張を呈する疾患のなかには自然治癒が期待できるものもあり、必ずしもすべてに対して治療が必要というわけではない。また、生後の尿路再建術が胎生期より障害を受けた所属腎機能にもたらす影響についてはあまり知られていない。われわれは、出生前に上部尿路拡張を呈する代表的疾患である水腎症（腎盂尿管移行部狭窄症）の小児を対象に、繰り返し RI 検査による分腎機能の評価を行い、腎盂形成術前後の分腎機能の変化を比較することにより、出生前診断された水腎症症例の手術適応と手術が所属腎機能に及ぼす影響について検討した。

〔 方法ならびに成績 〕

1991年から2004年の間に大阪府立母子保健総合医療センター泌尿器科にて出生前検査により診断された水腎症の小児326例中87例(26.7%)に腎盂形成術が施行された。対象はそれらのうち対側腎が健常で、手術前後に RI 検査による分腎機能の評価が繰り返し行われた60例。全例腎盂形成術の術後経過に問題なく、再手術が行われた1例は除外した。術後の RI 検査は1年目以降2年ごとに行われ、観察期間の違いにより術後の評価が初回のみ症例が22例、2回が14例、3回が16例、4回以上が8例であった。分腎機能は患側腎の%相対的 RI 摂取率で比較され、5%以上の増加を改善、5%以上の減少を増悪とした。観察期間は15-181ヶ月（平均100ヶ月）。

結果は、術後1年目の比較では術前に比べて分腎機能の改善がみられたのは60例中14例(23%)、増悪したのが9例(15%)であった。一方、観察期間終了時における比較では分腎機能の改善がみられたのは60例中7例(18%)、増悪したのが13例(34%)であった。術後1年目の比較で改善を示した14例中5例は観察期間終了時には分腎機能は元のレベルに戻っていた。術後早期の評価で分腎機能の低下（%相対的 RI 摂取率が45%未満）がみられた症例はいずれもその後改善傾向がみられず、進行性の低下を示す症例が9例中4例みられた。

〔 総 括 〕

腎盂形成術の成功にもかかわらず、患児のなかには術後分腎機能が不安定な症例がみられた。分腎機能の低下は進行性で術後早期には明らかでないこともある。また、術後早期の評価では一過性に分腎機能の改善を呈する症例もあり、機能回復を過大評価する恐れがある。腎盂形成術後の分腎機能の評価については長期にわたるフォローが必要である。

論文審査の結果の要旨

出生前の超音波画像検査にて、腎盂尿管移行部狭窄症による水腎症を呈した症例について、出生後、患側腎機能の推移を長期にわたって評価した。小児を専門とする医療施設での多数例について、長期間のRI検査による腎機能の評価を繰り返し行い、腎盂形成術前後の患側腎機能を検討している。出生前診断された無症候性水腎症症例の手術適応及び、手術が患側腎機能に及ぼす影響については、術後尿路閉塞が改善したにもかかわらず、分腎機能が進行性に低下する症例が一定数みられた。この臨床研究の中で長期にわたるフォローアップの重要性と胎生期より障害を受けた患側腎の回復能の限界が示唆され、無症候性水腎症の治療方針を決定するうえで臨床上有用な報告である。同様の報告は海外文献にも殆んど認められず、本研究は学位授与に値すると思われる。